若竹 ~WAKATAKE~

第４６号

2012／5／18発行

1 年生のみなさん、ご入学おめでとうございます。懸念だった 1 学期中間考査が終わり、新学期から何かとバタバタしていた学校行事もようやく一区切りですね。皆さんにとっては成績の方が気になるかもしれませんが、282 年ぶりという金環日食が目前に迫っています。教室や自分の部屋だけが世界ではありません。広い宇宙に目を向ける事もまた、学びです。

『なぜ勉強するのか』

大内　義博先生（中学部長：総合）

なぜ勉強しなければならないのか？この疑問は生徒の誰しもが持っています。中には目的を持って机に向かっている人もいるでしょうが、「勉強しておかないと将来後悔するぞと、言われるからしている」という人が多いのではないでしょうか。では、どのように後悔するのか。そこが納得できていないと、「言われるから、仕方なくする」という事になってしまいます。興味を持って取り組むのと嫌々とでは、同じ時間を費やしても成果がはるかに違ってきます。興味のあるゲームは、早く上達した経験はありませんか？上達した結果、得意分野になり、楽しくなる。誰にとっても、不得意な事は楽しくないものです。好き嫌いは後回しにして、まずは、あらゆる事に好奇心をもって取り組んでみてください。

将来の夢はありますか？夢を実現したいという強い思いを抱いていますか？自信を持って「ハイ」と答えられる者は、今はまだ少ないかもしれません。では将来、社会のために貢献したいですか？自分にとって興味のある仕事をしたいですか？「したくない」という人はいないでしょう。学校での勉強は、君たちが実現したいことを見つけた時、必ず役に立ってくれます。礎があってこそ、必要な技能を素早く身につけることが出来るのです。自分の進みたい方向には無関係に思えても、世界の常識や仕組みを幅広く身につける事は、多角的な思考をするためには必要です。勉強の努力は、楽しいものではありませんが、努力した、頑張ったという経験は、将来の君たちの大きな自信につながる事でしょう。

実は、私たち大人ももっと勉強しておけばよかったと思う瞬間が誰しも必ずあるのです。せっかくやりたい事を見つけても思うように進まない、その時になって初めて意義に気づくことがあるため、君たちにも「勉強しておきなさい」とアドバイスすることになります。創設者の三木省吾先生は、すばらしい言葉を残されています。胸像の石碑の碑文をしっかりと胸に刻みつけ、白陵生活を素晴らしいものにしていく支えの一つにしてもらいたい。

白陵に入学して　１

僕は白陵中学校に入学して、小学校の時とはちがうものを感じた。とても緊張した空気に包まれた入学式は素晴らしいものだった。

白陵中学校は、自然に囲まれている学校なので、辺りが静かで授業に集中することができる。白陵に６年間という長い期間通う上、高校受験がないので、いつまでもたるまないように心がけて生活したい。それと、僕は中学受験の勉強に必死で、外に出て遊ぶこともなく、体がなまっているので運動部に入りしっかり体をつくっていきたいと思います。

僕の将来の夢は医師になることです。理由は、今まで、そしてこれからもお世話になる家族の人たちや、病気やけがで困っている人々の役に立てるような人間になり、自分の事はもちろん、困っている人を助けられるようになりたいからです。そのために、まずは白陵での６年間の生活をきっちりとこなして、人生の土台をつくっていきたいと思います。

（１－２　田路正樹）

私は白陵に入学する前、一つ不安に思っていたことがありました。先生たちはとても厳しいのではないかと。でも、白陵に入学してから、その不安はなくなりました。どの先生もとてもおもしろく、授業はいつも楽しいです。

私は白陵に入ってから頑張りたいと思ったことがあります。

一つは勉強です。先生たちの授業はとても分かりやすいので、しっかり聞いて頑張ろうと思います。

もう一つは信頼です。この学校は、新しい仲間ばかりです。まだよく知らない仲間なので、本当に信頼できる、とは言えないと思います。６年間、色々なことを協力し合いながら、友達やクラスメートに、「本当に信頼できる」と言ってもらえるような人になりたいと思います。

苦手なことにも挑戦し、この二つのことも頑張って、よい学生生活を送りたいです。

（１－４　武田紗矢香）

ぼくは、この白陵での６年間の生活で、勉強と部活を両立して頑張ろうと思っています。小学校の放課後はあまり運動をしていなかったので、一度部活に入ったら部活を変えずにそれ一つで６年間を過ごし、授業、休み時間、部活、家庭学習のけじめをつけて頑張りたい。

白陵で学習する上で、ぼくは、友達との会話、部活などすべてにおいて楽しみたい。そして、この白陵を卒業するときにはいい学校だったと思えるようにしたいです。

勉強面において、学習環境の整った白陵で勉強するからには、わからないところは先生や友達に聞いたり、白陵でしか学べないことを学びたいと思っています。そして志望大学に合格して、夢を実現できるように、日々精進して、頑張りたいです。

（１－１　岡田晟良）

僕がこの白陵に入学して最初に思ったことは「土地がすごく広いな。」ということです。大きな校舎に記念棟まであってびっくりしました。次にすごいと感じたのは校舎のきれいさです。これだけきれいなのはきちんと掃除をしたり、しっかりした校則があるんだろうなと思いました。でも感心とともにそれについていけるかという不安もありました。でも入校時訓練などをしているうちに、その校則は当たり前のことをいっているだけなんだとわかりました。それに清掃指導で出会った先輩たちは面白くて優しくて、たよりになるなと思いました。先生もこわそうな人もいるけど、実は面白かったり、いい先生ばかりで安心しました。これからは白陵生の一員として、この白陵がさらにいい学校になるように努めていきたいと思っています。

（１－２　山本健太郎）

課題図書感想文　１

「まちがったっていいじゃないか」を読んで　　１－１　井上幹大

この本を読んで、森毅さんの考え方に驚きました。すごい考え方というより、そのようなことは考えてもいなかったのです。そのような感じが、何回もこの本を読んでいる間に出てきました。

今ぼくは、会社の経営か、国にかかわる仕事がしたいと思っています。そんな仕事が、かっこよく見えるからです。でも、友だちに「たぶん無理だと思う。」と言われました。ぼくも、「そんなものなのかな。」と思ってあきらめかけました。だけど、この本には、「あきらめるより、なやむ方がよい」とか「いままでの成果よりこれからの問題だ」とかのっていました。要するに、老人のように今の自分に満足してはいけないという意味です。だから必要なのは、「向上心」ということです。それは、夢とはいくらかは可能性があるんだから、あきらめず挑戦し続けるということ。それに、今までに何をなしとげたかより、今のことを考えることが大事だからです。やっぱり、ぼくは自分の夢に向かってがんばっていきたいです。

ぼくは、６年間小学生らしく真面目に過ごしてきました。自分自身でも、なんの問題もなく過ごせたと思っていました。でも、この本には、「型にはまろうとせず、自分らしくあることが最上だ。」とのっていました。つまり、学生とか教師とかは、社会的に存在している身分だという意味です。言われてみればそうです。だから、人というものは、いつわりの自分だと、いっしょに過ごしても全然おもしろくありません。今からは、普通と違う自分をかくそうとせず、ありのままの自分でいます。そのために、ただありのままの自分という人間に自信を持ちます。それは、ありのままの自分とは、うそでない本当の「個性的」だからです。

ずっとぼくは、算数ではやり方を出来るだけ早くおぼえて、すぐ問題を解いていました。だから、問題が解けるようになってからは、全然問題を解く面白さが無くなってしまいました。それは、問題をとくにしても、単純な作業となってしまうからです。だけどこの本には「解き方を身につける前の、まだ解き方のわからない間だけが、力をつけるチャンスであり、本当におもしろい時でもある。」と書いてありました。要するに、早く公式をおぼえて問題を解くより、何回も問題を読んだり、じっくり考えたりする方が、力もつくし、問題も早く解けるようになるということです。でも、勉強とは最初からおもしろくないもので人にやらされるものだと言う人もいます。だけどぼくは、それは違うと思います。勉強は、さっきのように大人がおもしろくないようにしているだけで、本当は、テレビや漫画のように面白半分の方が、成績がよくなると思います。それは、ただ真面目にしているだけだと、おもしろくないからあきてしまったり、それから逃げたくなったりするからです。それに、面白半分の方が気楽に出来て勉強を楽しめたりできるからです。

「幽霊」を読んで　　１－５　小林　新之介

僕がなぜこの幽霊という本を選んだかというと、課題図書の中で一番興味を持ったからです。幽霊という題名なのだから、幽霊の事について書かれていると思っていたのですが、幽霊という言葉が引用されているのは、「ママの幽霊」と「ゆ、う、れ、い」とくらいしか出て来ませんでした。また、内容も想像していたものと違い非常に難しいものであり、一度読んだだけでは理解できず何度も分からない言葉を調べながら読み返す事となりました。

作者は、文中で「死」という言葉を多用していた。幽霊という言葉よりもむしろ「死」という言葉によって僕に何かを伝えようとしていた。なぜ「死」という言葉がたくさん出てきたのだろうか。

通常、死とは万物にとって恐ろしいものであり、悲しいものである。ましてや、やさしいと感じたり、あこがれたりするものではない。第二章序盤あたりで主人公の姉が病で亡くなり、その悲しさから涙が流れる親戚達の「眼球」を見た時、その眼は、実に美しくうるおっていた。その時から主人公は「きっと<死>とはやさしいものなのにちがいない」と思うようになっていった。

なぜ主人公は死にあこがれたり死とはやさしいものと思ったのだろうか。それは、少年の育った環境から鑑みることができる。少年の父はとてもしずかであったが、調べ物などをする時は、居間に閉じこもり食事も取らないほど集中する人物であった。また、文中では父の顔がうかんでこないほど印象が薄いとも書いてある。このことから、父親の子どもに対する愛情が乏しかったと思われる。そんな父親も主人公が少年時代に亡くなり、母や兄姉も亡くなった。もしその立場が自分であったなら、主人公と同じくして死へのあこがれが芽生えるのかもしれない。

青年になった主人公は死についてこう考えている。「死は自分に巣くっている。」僕は主人公が、青年になってもまだ死のことについて考えているのは、幼い時にあまりにも死を見すぎて、親しく感じたからだと思う。だから巣くっているとも考えたのだと思う。次に主人公は、「幼児とともに青年になろうとしている人々に親しい。」とも考えている。この意味を自分なりに考えてみると、幼児とともに青年になろうとする、というのは幼児の気持ちのままという意味で、幼児は死を特に恐怖に感じるからという意味だと思う。

主人公は青年になっても死について考えている。死は<死>と書かれていたが、読み進めると自然も<自然>となっていた。第三章の最後では「ぼくはこの世の誰よりも<自然>と関係のふかい人間だ。ぼくは自然からうまれてきた人間だ。ぼくはけっして自然を忘れてはならない人間なのだ。」と書いてあることから、主人公が死はやさしいものだと言ったのは、死がやさしいのではなく、自然に人が死んだ人を心から悲しむその心がやさしいと感じたのではないだろうか。

最後に、この本を読んだ感想として、今までの小学校生活で百冊以上の本を読んだが、これほど難解な本を読んだことがなかった。ただ、この本を読むことによって今まで考えもしなかった<死>についていろいろ考えることができた。しかし、作者がこの本によって読者に伝えたかったことは、僕にはわからずじまいだった。

この本の事について、父と何度か話をし、北杜夫の代表作は「どくとるマンボウ航海記」や「どくとるマンボウ昆虫記」であると聞いた。題名からしておもしろそうなので、早速読んでみることにしよう。

「そこに僕はいた」を読んで　　１－３　上田　明希

私が５冊の本の中から、この本を選んだ理由は、以前塾の教材で一部分が使われていたからです。三ぺんぐらい読んだ記憶があります。

短ぺんになっていたので、普段の本と違いおもしろいとは感じられなかった。作者の意図が分かりにくかった。私がもう少し成長して大人に近づいたら、この本の面白さが分かるかもしれない。

作者は変わっていると思う。自分とは考え方が全く違うからだろうか。作者と同世代の母に聞いてみた。母も理解できないと言っていた。作者と同性の父にも聞いてみた。父も理解しがたいと言っていた。

この本が全て実話だとしたら、作者は異常なほど記憶がよく、細かい人物と思う。

作者はよく引っこし転校をしている。でもその度に友だちをつくっているので初対面の人の接し方が慣れている。

私は転校したことがない。近所の幼稚園に行き、その友だちのまま小学校に入学し、８年間同じ友だちの輪の中にいる。知らない子でも、自分の友だちの友だちという場合が多いのでなじみやすかった。

塾の友だちが初めて、この輪の中から出て出来た友だちだった。初めの４ヶ月間は全く友だちが出来なかったが、クラス替えを期に、友だちが増えていき、今ではメールをやりとりし、休日には遊びにも行けるほどの仲になった。私は人見知りで、親しくなるのに時間がかかるが、一度仲良くなったら長く続くようだ。

白陵中学校では、知っている友だちが三人しかいない。その三人と同じクラスになりたいと思う。けれどなれなかったら誰かが話しかけてくれるのを待つしかないとも思う。

でも、すぐに話しかけれる人がうらやましいとは思わない。そこから仲良くなれるかどうかは別だと思うからだ。

作者はよくケンカをしている。短気なんだと思った。同じ小学校の男子もたまに男子同士でケンカをしている。その後でどうにかなるわけではないので、ケンカをする意味が分からない。女子は、言葉で本人の前でもはっきり言う。私は言われた記憶がほとんどない。すぐに流すからだ。言い返すと余計にひどくなることを知っている。母にはうまい具合に話を変えるといいと言われている。

私は周囲の事があまり気にならない性格だと思う。友だちに腹を立てたりケンカをしたりしない。周りの出来事もあまり覚えていない。本を読んで作者の性格をかいま見て、いろんな考えの人がいるのだとつくづく感じた。

この本は「辻一成」という作家であり映画監督、ミュージシャンと様々な職業を持つ人の学生時代、青春時代の生き方を見ることができる。

私は、まだなりたい職業や、どんな風に生きたいかまったく決まっていません。白陵中学校、高校の六年間で見つけたいと思っています。

中１　裏山登山

４月２７日、４時間目から登山をしました。始めはそんなにきつくない道かと思い、楽しさを期待していたら、実際に歩いたのはかなり高い山３つ。思った以上にきつく、スタミナもぎりぎりでした。

昼食を友達と食べて帰り道を歩いていると、途中で道に迷いかけました。にもかかわらずみんなで歌を歌いながら帰ったので、疲れたけれど楽しく、いい思い出になりました。　　（１－４　高槻峻）

今日の裏山登山で、私は何かを得たような気がした。それは「自信」だと思った。なぜならこの登山も「自分の心」に「自信」を持たないとできないことだと思ったから。また勉強も同じだと思う。わたしはこの裏山登山で学んだ「自信」をこれからの白陵生活で活かせていけるようにがんばりたい。　　（１－２　中西美友）

僕たちが登った山は記念棟の近くの山です。土と岩が交互になっていて、岩ではよく滑って少し危ない登山でした。が、頂上辺りを見わたした景色は絶景でした。

僕はいろんな動物や植物を先生に質問しました。

そうしている間に鹿島神社に着きました。鹿島神社に着いたときは満足感と達成感でいっぱいでした。裏山に行ってとてもいい経験になったと思います。（１－１　菅潤一郎）

今日は登山をしました。最初の方はみんなで喋りながら登っていたけど、だんだんしんどくなって、休憩の回数が増えていきました。弁当と柏餅のおいしさは格別でした。帰りは岸みたいなところをのぼってすごく高い所まで行って景色がとてもきれいでした。下山の時はみんなでワイワイさわぎながらおりたのでとても楽しくて、みんなと仲良くなれたと思います。しんどかったけど、楽しかったです。
（１－５　山内理子）

先日の裏山登山は、登山経験のない自分にとっては、すごく疲れる行事でした。上りでは、土がない、すべりやすい一つの岩を登ったり、上を見ずに歩くと頭を打ったりしました。また、下りでは、すべりやすい岩を下ったり、土から出た小さな岩で足をくじいたりしました。けれど、登山をしてつかれた後に食べたご飯は苦労をほめてくれているかのように、大変おいしかったです。　　（１－３　岩瀬貴弘）

私が登山経験をしたのは初めてでした。山は意外に険しく、時には足の踏み場がないような時もありました。しかし段々と視界が広がるにつれ、期待感も増えていきました。始めはほど遠いと思っていたゴール地点も、後もう少しで手に届くほどの位置となりました。そして、みんなの姿が見えた時、今までに味わったことのないような達成感がありました。いつか機会があったら、また登山をしてみたいと思っています。
（１－１　大西未生）